

一 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日本語には、触覚に関する二つの動詞があります。

① さわる

② ふれる

英語にするとどちらも「touch」ですが、それぞれ微妙にニュアンスが異なっています。

たとえば、怪我をした場面を考えてみましょう。傷口に「さわる」というと、何だか痛そうな感じがします。さわってほしくなくて、思わず<sup>①</sup>患部を引っ込めたくなる。

では、「ふれる」だどうでしょうか。傷口に「ふれる」というと、状態をみたり、薬をつけたり、さすったり、そつと手当てをしてもえそうなイメージを持ちます。痛いかもしれないけど、ちょっと我<sup>②</sup>マンしてみようかなという気になる。

虫や動物を前にした場合はどうでしょうか。「怖くてさわれない」とは言いますが、「怖くてふれられない」とは言いません。スライムや布地の質感を確かめてほしいとき、私たちは「さわってごらん」と言うのであって、「ふれてごらん」とは言いません。

不可解なのは、気体の場合です。部屋の中の目に見えない空気を、「さわる」ことは基本的にできません。ところが窓をあけて空気を入れ替えると、冷たい外の空気に「ふれる」ことはできるのです。

抽象的な触覚もあります。会議などで特定の話題に言及することは「ふれる」ですが、すべてを話すわけではない場合には、「<sup>A</sup>さわりだけ」になります。あるいは怒りの感情はどうでしょう。「逆鱗にふれる」というと怒りを爆発させるイメージがありますが、「神経にさわる」というと必ずしも<sup>③</sup>怒りを外に出さず、

イライラと腹立たしく思っている状態を指します。

つまり私たちは、「さわる」と「ふれる」という二つの触覚に関する動詞を、状況に応じて、無意識に使い分けているのです。もちろん<sup>④</sup>アイマイな部分もたくさんあります。「さわる」と「ふれる」の両方が使える場合もあるでしょう。けれども、そこに私たちは微妙な意味の違いを感じとっている。同じ触覚なのに、いくつかの種類があるのです。

哲学の立場からこの違いに注目したのが、坂部恵です。坂部は、その違いをこんなふう論じています。

愛する人の体にふれることと、単にたとえば電車のなかで痴漢が見ず知らずの異性の体にさわることは、いうまでもなく同じ位相における体験ないし行動ではない。

一言でいえば、ふれるという体験にある相互嵌入<sup>注1</sup>の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるところという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機が、さわるということの場合には<sup>⑤</sup>抜け落ちて、ここでは内―外、自―他、受動―能動、一言でいってさわるものとさわられるものの区別がはっきりしてくるのである。

「ふれる」が相互的であるのに対し、「さわる」は一方的である。ひとことで言えば、これが坂部の主張です。

言い換えれば、「ふれる」は人間的なかわり、「さわる」は物的なかわり、ということになるでしょう。そこにいのちをいくしむような人間的なかわりがある場合には、それは「ふれる」であり、おのずと「ふれ合い」に通じていきます。逆に、物としての特徴や性質を確認したり、味わったりするときには、そこには相互性は生まれず、ただの「さわる」にとどまります。

重要なのは、相手が人間だからといって、必ずしもかわりが人間的であるとは限らない、ということ

す。坂部があげている痴漢の例のように、相手の同意がないにもかかわらず、つまり相手を物として扱って、ただ自分の欲望を満足させるために一方的に行為におよぶのは、「さわる」であると言わなければなりません。傷口に「さわる」のが痛そうなのは、それが一方的で、さわられる側の心情を無視しているように感じられるからです。そこには「ふれる」のような相互性、つまり相手の痛みをおもんばかるような<sup>⑥</sup>ハイリヨはありません。【ア】

もっとも、人間の体を「さわる」こと、つまり物のように扱うことが、必ずしも「悪」とも限りません。たとえば医師が患者の体を触診する場合。お腹の張り具合を調べたり、しこりの状態を確認したりする場合には、「さわる」と言うほうが自然です。触診は、医師の<sup>⑦</sup>専門的な知識を前提とした触覚です。ある意味で、医師は患者の体を科学の対象として見ている。この態度表明が「さわる」であると考えられます。

同じように、相手が人間でないからといって、必ずしもかわりが非人間的であるとは限りません。物であったとしても、それが一点物のうつわで、作り手に思いを馳せながら、あるいは壊れないように気をつけながら、つくしむようにかかわるのは「ふれる」です。では「外の空気にふれる」はどうでしょう。対象が気体である場合には、ふれようとするこちらの意志だけでなく、実際に流れ込んでくるという気体側のアプローチが必要です。この出会いの<sup>①</sup>「1」が「ふれる」という言葉の使用を引き寄せていると考えられます。

人間を物のように「<sup>②</sup>2」こともできるし、物に人間のように「<sup>③</sup>3」こともできる。このことが示しているのは、「ふれる」は容易に「さわる」に転じうるし、逆に「さわる」のつもりだったものが「ふれる」になることもある、ということなのです。

相手が人間である場合には、この違いは非常に大きな意味を持ちます。たとえば、障害や病気とともに生きる人、あるいはお年寄りの体にかかわるとき。<sup>⑧</sup>冒頭に出した傷に「ふれる」はよいが「さわる」は痛い、という例は、より一般的な言い方をすれば「ケアとは何か」という問題に直結します。

ケアの場面で、「ふれて」ほしいときに「さわら」れたら、勝手に自分の領域に入られたような暴力性を感じるでしょう。逆に<sup>B</sup>触診のように「さわる」が想定される場面で過剰に「ふれる」が入ってきたら、その感情的な湿度のようなものに不快感を覚えるかもしれません。ケアの場面において、「ふれる」と「さわる」を混同することは、相手に大きな苦痛を与えることになりかねないのです。

あらためて気づかされるのは、私たちがいかに、接触面のほんのわずかな力加減、波打ち、リズム等の中に、相手の自分に対する「態度」を読み取っているか、ということだと思います。相手は自分のことをどう思っているのか。あるいは、どうしようとしているのか。「さわる」「ふれる」はあくまで入り口であって、そこから「つかむ」「なでる」「ひっぱる」「もちあげる」など、さまざまな接触的動作に移行することもあるでしょう。こうしたことをすべてをひっくり返して、接触面には「人間関係」があります。

この接触面の人間関係は、ケアの場面はもちろんのこと、子育て、教育、性愛、スポーツ、看取りなど、人生の重要な局面で、私たちが出会うことになる人間関係です。そこで経験する人間関係、つまりさわり方／ふれ方は、その人の幸福感にダイレクトに影響を与えるでしょう。

「よき生き方」ならぬ「よきさわり方／ふれ方」とは何なのか。触覚の最大のポイントは、それが親密さにも、暴力にも通じているということだと思います。人が人の体にさわる／ふれるとき、そこにはどのような<sup>⑨</sup>キン張<sup>⑩</sup>や信頼、あるいは交渉や<sup>⑩</sup>ジョウ歩<sup>⑩</sup>が交わされているのか。つまり触覚の倫理とは何なのか。

触覚を担うのは手だけではありませんが、人間関係という意味で主要な役割を果たすのはやはり手です。さまざまな場面における手の働きに注目しながら、そこにある触覚ならではの関わりのかたちを明らかにすること。これが本書のテーマです。

（伊藤亜紗『手の倫理』へ講談社・二〇二〇年）に基づく

注1 嵌入……読みは「かんにゆう」。意味は、はめ込むこと。また、はまり込むこと。

問一 次に示す表現【a】〜【e】は、傍線部①③⑤⑦⑧の文字を使用したものである。【a】〜【e】のそれぞれの表現のうち、二重傍線部の漢字の読みをひらがなで書け。

【a】患う      【b】喜怒哀楽      【c】抜本的      【d】専ら      【e】冒す

問二 傍線部②④⑥⑨⑩について、カタカナを漢字にあらためよ。

問三 次に掲げる〔脱文〕は本文から抜き取ったものである。この〔脱文〕を挿入するのにもっとも適切な場所を本文中の【ア】よりも前の部分から探し出し、挿入部分の直前の十文字（句読点や記号も一字として数える）を抜き出せ。

〔脱文〕 物に対する触覚も同じです。

問四 波線部A「さわりだけ」について、「さわりだけ話す」という表現はどのような意味になるか。次の選択肢①〜④よりもっとも適切なものを一つ選べ。

- ① 都合が悪くない部分だけ話す
- ② 最初の部分だけ話す
- ③ 最後の部分だけ話す
- ④ 要点だけ話す

問五 空欄 1 には本文中の漢字三文字の表現が入る。この空欄にあてはまるもっとも適切な表現を本文中より抜き出せ。

問六 波線部B「触診のように「さわる」が想定される場面でも過剰に「ふれる」が入ってきたら、その感情的な湿度のようなものに不快感を覚えるかもしれない」について、この場面でなぜ「不快感を覚える」おそれがあるのか。その理由を説明せよ。なお、解答にあたっては次に示す各条件をすべて満たすようにすること。

〔条件1〕 六〇字以上、八〇字以内で書く（句読点や記号も一文字として数える）。

〔条件2〕 二文に分けて書く。また、第一文は「触診は」で、第二文は「にもかかわらず」で始める。

〔条件3〕 第一文には「体を」という表現を、第二文には「人間的」という表現を入れる。

問七 空欄 2 および 3 には、「ふれる」もしくは「さわる」という語のいずれかが入る。それぞれの空欄にあてはまる適切な表現を書け。

問八 次に示す①～③の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

① 触覚を表す表現には種類があり、それらには意味上の多少の違いがある。我々はその意味の微細な違いをとらえ、恣意的に使い分けている。

② 気体に対して「ふれる」という表現が用いられることがしばしばあるが、それは適切とは言えない。

③ 接触の場面には接触者と被接触者がおり、接触者が被接触者をどのようにとらえているのかがその接触のありように表れてくる。

## 二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

### 日本における建築家の起源

ここまで特に定義もせず、建築家という職業名を書き連ねてきたが、建築家とはそもそもどのような職業なのだろうか？ 建築士とはどう違うのだろうか？

日本において、建築家という職業を理解することはとてもむずかしい。その一番の理由は、建築家という広く知られた職業名と、こちらもよく知られた（一級）建築士という国家資格が、重なりつつもズレているからである。日本において、建築家という職業に公的な資格は必要ない。しかし、建築士になるには試験に合格して、免許を登録する必要がある。

そうだとすれば、建築家という職業名は、一部の建築士がカッコつけて名乗っているだけなのか、と訝いぶかしむ方もいるかもしれない。しかし、話はそう簡単ではない。建築家という職業は、一級建築士という制度が整えられるよりも前から日本に存在する。

明治時代、日本は西欧列強に追いつくために、お<sup>①</sup>雇い外国人を招聘し、西洋の学問や技術を取り入れた。その中には建築も含まれていた。具体的には、一八七三年の工部大学校創設から四年後、イギリスより招聘された建築家ジョサイア・コンドルによって日本におけるアーキテクト教育が開始された。

やがて建築家の数が増えていくと、建築家たちは、自分たちの職能を守るため、法制度を整えようと国会に対してロビイング活動を行う。しかし、大工から派生した建設業者やその団体が建築家の法制度化に強く反対するなどしたため、欧米のような、建築家を規定する法制度の整備は見送られた。その代わりに、設計・監理のみならず、建築に携わるほとんどすべての業務を抱合した建築士という資格が、戦後になってようやく作られたのである。それゆえ、その数は<sup>②</sup>膨大である。

二〇一九年現在、一級建築士は三七万三四九〇人が登録されている。ちなみに二級建築士は七七万一二

四六人であり、二級建築士も建築家に含まれば、実に一〇〇万人以上の建築家が日本に存在していることになる。この人数は、医師三二万七二一〇人、弁護士四万二〇九四人、公認会計士三万二六九七人と比較すると、改めて<sup>A</sup>その規模の大きさがわかる。

その一方で、建築家という職業そのものを規定するための法律や制度は制定されなかった。建築士という資格は日本に根づいた建築家を規定する資格ではない。そのため、それ以来日本には、建築家と建築士が重なりつつもズレているダブルスタンダードの状態が続いているのである。

### 現代日本における建築家とは

現代日本における建築家とはどのような職業なのだろうか。

あなたは建築家と聞いて誰を思い浮かべるだろうか？ オリンピックのメイン会場を設計した隈研吾や、コンクリートの打ち放しの建築で世界的に有名になった安藤忠雄などが、真っ先に浮かんだかもしれない。あるいは、坂茂や妹島和世が思い浮かんだ方もいるだろう。

それでは、一級建築士と聞いて誰を思い浮かべるだろうか？ 家族や友人に一級建築士の方がいたら、その方の名前が思い浮かんだかもしれない。しかし、一級建築士を思い浮かべてほしいと言われ、安藤忠雄や隈研吾の名前が<sup>③</sup>ソク座に出てくることはなかったのではないだろうか。

たしかに、安藤忠雄や隈研吾を含め、さきほど名前を挙げた建築家の方々は皆、一級建築士の資格を持った建築家である。しかし、彼らは建築家という肩書で紹介されることはあっても、一級建築士という紹介のされ方は稀である。

例えば、あるイベントに隈研吾が登壇したとして、「本日は、一級建築士の隈研吾さんにお越しいただきました」などと紹介されることは、まずないだろう。「建築家の隈研吾さんにお越しいただきました」と紹介されるはずである。どちらも正しい紹介のされ方であるが、なぜか前者に大きな違和感を覚える。

違和感の原因は、建築家は<sup>B</sup>属人的な呼称であり、建築士は資格制度全体、建築設計技術者一般を指す<sup>④</sup>匿名的（アノニマス）な<sup>⑤</sup>呼称であるからだ。

なぜ、建築家は属人的な呼称になってしまっているのだろうか。その理由は、資格制度の整備が叶わなかった状況下で、有名建築家の個人的な活<sup>⑥</sup>ヤクの積み重ねによって建築家の歴史が作られてきたからである。

こうした事実は建築家の職業実践に複雑な様相を生じさせる。ひとつは、職業アイデンティティの問題である。建築家を目指し、建築家として仕事をしているつもりであっても、対外的に自己紹介する際、「自分は建築家ではない」「自分を建築家と名乗るのはおこがましい」などと口走ってしまうのである。職業生活において職業アイデンティティが不安定な状態であるということはあまり幸福なことではない。

日本においては、建築家という職能名が属人的であるゆえ、建築家を名乗ろうとすると、個人としての有名性がある程度要求される。したがって、「無名の建築家」という表現は原理的に成り立たない。有名建築家が過去を振り返って、「安藤忠雄がまだ無名の建築家だった時代」などと言うことは可能だ。

したがって、実績もないのに、建築家という肩書を使おうとすると「自称建築家」などと同業者から揶揄<sup>やゆ</sup>されることがある。

### 建築家はなぜ存在しつづけていられるのか

ここまですてくると、建築家という職業には法律や制度といった公的なバックグラウンドが存在しないにもかかわらず、なぜ<sup>C</sup>雲散霧消せず存在しつづけているのか、という疑問が生じてくる。しかも、細々と生き残っているのではなく、世界的に活<sup>⑥</sup>ヤクする建築家も多く、その存在感はかなり大きいのである。

そこには、法律や制度といった公的なバックグラウンドに代わる、存続のための何らかのメカニズムが存在しているのではないか、という仮説が成り立つ。そのメカニズムについては第一章と第二章で詳しく

述べていくが、先取りして要点を述べておきたい。

個々の建築家に<sup>⑦</sup>染み付いている「建築家らしいふるまい」というものがある。それは思考方法や審美的態度、ファッションなどの装具や文房具の選択に至るまで、建築家の実践に影響を及ぼす。それらは、「僕は建築家だからこのように考えよう」「私は建築家だから、この建物は価値のある建築とは見なさないでこう」などと意識レベルで認知されるものではない。こうしたモノの見方や考え方は、ほぼ自動化された状態で行われている。

このようなモノの見方や考え方は、たんに対象物を見たり、考えたりすることだけに作用するものではない。それは、あらゆるものを区別／区分していく働きを持っている。建築とそれ以外のただの建物、保存すべき建築と、壊してもいい古い建物、<sup>⑧</sup>ハウシユウが安くても取り組むべき仕事と、高額の<sup>⑧</sup>ハウシユウでも関わりたくない仕事、そして、建築家と非建築家を区別していく。建築家が日々、無意識的／自動的に行っているこうした区別の基準は建築家同士であれば、だいたい一致している。

建築家というのは、こうした一人ひとりの建築家の性向や意識の集合体として構築されている。その集合体としての建築家は、建築家個人にも影響を与えていく。こうした、作り／作られ、という<sup>⑨</sup>ジュンカン運動の動態の中に建築家という<sup>⑩</sup>ガイネンは存在する。（松村淳『建築家の解体』〈筑摩書房・二〇二二年〉に基づく）

問一 傍線部①②④⑤⑦について、漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部③⑥⑧⑨⑩について、カタカナを漢字にあらためよ。

問三 波線部A「その規模の大きさがわかる」について、「その規模」が大きくなった要因は何か。本文の内容をふまえ、その答えとしてもっとも適切なものを次の選択肢①～④より一つ選べ。

- ① 建築家の業務だけではなく、大工から派生した建設業者やその団体がまかかってきた業務をもカバーするかたちで建築士資格は整備されたため。
- ② 大工から派生した建設業者やその団体が主導して、建築に関連する業務全般を網羅するかたちで建築士資格は整備されたから。
- ③ 建築士資格は圧倒的多数を占める大工らを中心とした建設業者やその団体が自らの職能を保護するという発想に基づいて整備されたから。
- ④ 建築士資格は大人数の建設業務従事者を抱える建設業者のために整備され、建築家を除外した資格であるから。

問四 波線部B「属人的な」の意味としてもっとも適切なものを次の選択肢①～④より一つ選べ。

- ① 特定の個人に依拠する
- ② 世間に広く認知されている
- ③ 公的性格を持たない
- ④ 歴史的経緯を背景に持つ

問五 波線部C「雲散霧消」に関連し、次の(一)(二)の問いに答えよ。

(一) 四字熟語「雲散霧消」の読みをひらがな八文字で書け。

(二)「雲」で始まる慣用表現の一つに「雲泥の差」がある。この表現の類義的表現を次の①～⑥の中から二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。

- ① 月とスッポン      ② 大同小異      ③ 天と地ほどの差  
④ 同工異曲      ⑤ 五十歩百歩      ⑥ どんぐりの背比べ

問六 次を示す①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

- ① 目立った業績のない者が建築家としての自負心を持ちながらも自ら建築家と称するのを避けてしまうことは、建築家としての自己認識のありようが安定せず好ましくない。
- ② 世間で評価の高い建築家が一級建築士として紹介されない理由は、建築士という資格が後発のものであると共に、その資格が個人の特定を避けるという性質を有していることにある。
- ③ 建築家ならではの考え方や見方すなわち「建築家らしいふるまい」は、建築家としてのあるべき判断が自覚された上でのものではない。
- ④ 個々の建築家の性向や意識の基準は建築家同士であればおおよそ一致する。

三

次の(一)(二)の問いに答えよ。

(一) 次の①～⑤の各文について、カタカナで記された傍線箇所を漢字と送り仮名を用いた表記にあらためよ。その際、送り仮名についてはひらがなで記すこと。

- ① 別れをオシム。
- ② 気がマギレル。
- ③ アブナイ目に遭う。
- ④ ハゲマシの言葉をかける。
- ⑤ この時期に雪が降るのはメズラシイ。

(二) 次の①～③の四字熟語について、□内に入る適切な漢字をそれぞれの選択肢ア～ウより一つ選べ。

- |        |         |      |      |      |
|--------|---------|------|------|------|
| ① 絶□絶命 | 〈①の選択肢〉 | 【ア】体 | 【イ】対 | 【ウ】台 |
| ② □離減裂 | 〈②の選択肢〉 | 【ア】私 | 【イ】死 | 【ウ】支 |
| ③ □機一転 | 〈③の選択肢〉 | 【ア】新 | 【イ】心 | 【ウ】真 |

(以下余白)